

原著論文

韓国における学校図書館と公共図書館の協力型プログラムの開発：
読書メンタリングプログラムを中心に

Development and Implementation of a New Cooperative Program for School and Public Libraries in Korea: Focused on Reading Mentoring Program

ユンユラ
You-Ra YOUN

Résumé

Purpose: This paper aims to propose a new cooperative program for School and Public Libraries in Korea. First, cooperation sought by both public and school libraries are reviewed. Second, a cooperative program was designed by taking specific circumstances of public libraries as well as school libraries. After its implementation, achievements, issues, and possible improvements of the program are discussed.

Methods: Surveys and some additional interviews were conducted as the preliminary field study in 24 public libraries, 644 elementary, middle, and high school libraries in Busan between April and June in 2012. Based on the results of the research, the Reading Mentoring Program was designed, and was implemented with mentors during the period of between 2012 and 2014. Analysis was conducted using results of reports and interviews of elementary school students who participated in the program, brief surveys and interviews of school teachers, as well as records of activities and plans created by mentors who implemented the program, and surveys and interviews conducted to the mentors.

Result: The Reading Mentoring Program was implemented and managed for three years with undergraduate students in Library and Information Science acting as mentors. The results of the study on public and school libraries showed high demands for mentors with specialized knowledge in reading education. The analysis shows that the Program has had good effects on public and school libraries as well as mentors. Remaining issues are the need for analyzing mentees' needs, improvements on educational content for mentors, development of manuals for implementing the Mentoring Program, and the establishment of a cooperation system for managing the program.

ユンユラ：東義大学 文献情報学科

You-Ra YOUN: Dong-Eui University, Dept. of Library and Information Science, 176 Eomgwagnago, Busanjin-gu, Busan, 614-714 Korea

e-mail: yryoun@deu.ac.kr

受付日：2015年8月31日 改訂稿受付日：2015年12月16日 受理日：2016年1月25日

- I. はじめに
- II. 韓国の学校図書館と公共図書館の現状調査
 - A. 調査方法
 - B. 学校図書館の現状
 - C. 公共図書館の現状
 - D. 考察
- III. 読書メンタリングプログラムの実践と分析
 - A. 調査の概要
 - B. 計画および準備
 - C. 実践
 - D. 活動内容の分析
 - E. 考察
- IV. 結論

I. はじめに

学校図書館は子どもや青少年の近くでサービスを行い、生涯学習機関としての図書館利用の習慣を身につけさせるための中核的な機関であると言われる。しかし、韓国の学校図書館は専門担当者の不在、蔵書の不足、図書館空間の狭さなどの制度的・環境的な問題を抱えているため、その役割を担当するのは困難な状況である。そのため、学校図書館を支援するための多様な方案策が論じられている。その中の一つとして他の図書館、特に公共図書館との協力による役割の強化が活発に議論されている。「図書館法」第23条では、地域の中央図書館は“公共図書館だけを対象にするのではなく、学校図書館、大学図書館、専門図書館などの地域内のすべての図書館を包括する図書館政策を立てる”として、学校図書館に対する協力を義務づけている。

図書館間での協力の目標は、相互貸借、総合目録作成、共同図書購入、書誌事項の提供や交換などを行い、図書館資源の相互交換および共同活用を通じて、図書館や利用者の相互利益を高めることにある¹⁾。例えば、G. E. Evansは、図書館間の協力の利点として、①利用者の情報アクセスの向上、②限定された資源の活用の最大化、③図書館職員の専門化の強化、④重複する業務の減少、⑤図書館へのアクセスやサービスに対する積極的な

広報、⑥協力関係にある図書館の間の業務の効率化、などを挙げている²⁾。現在、韓国ではこれについての関連研究が進められ、学校図書館と公共図書館の間の協力の重要性が論じられている^{3),4)}。また、「第1次学校図書館振興基本計画」⁵⁾の推進計画の一つとしても公共図書館との協力が進められてきた。

その結果、学校図書館の運営や読書教育に関して、地域の公共図書館に支援を求める学校が増えている。そのため、公共図書館側では「学校図書館支援センター」、「学校図書館支援課」、「学校図書館協力チーム」などを設置して、学校図書館支援業務を公共図書館の重要な業務として明文化しようとする動きも現れている⁶⁾。今後、より効率的で効果的な協力のためにさらに多くの研究が必要とされている。

学校図書館と公共図書館の協力についての研究を行ったJohn Abdul Kargboは、協力関係を成功させるには、サービスを設計・運営する機関や担当者の信頼関係と相互作用が重要であると主張している⁷⁾。そのためには、明確に位置づけられた相互協力の担当者が双方の館にいないと行かない。しかし、韓国では、学校図書館担当者の配置に対する法的な制度がないため⁸⁾、配置されている担当者のほとんどが非常勤であり、Kargboの言う関係を構成することは難しい状況にある(第1表参照)。

第1表 韓国の学校図書館の設置率や担当者の配置率 (2012年)¹

	学校図書館の設置			学校図書館担当者の配置				
	学校数 (校)	図書館数 (館)	設置割合 (%)	司書教師 (人)	司書 (人)	非常勤司書 (人)	合計 (人)	配置割合 (%)
全国	11,568	11,518	99.6	753	42	4,581	5,376	47.0
釜山	644	644	100.0	38	1	238	277	43.0

¹ 出所: 2012年学校図書館統計資料⁹⁾参照

実際、学校図書館と公共図書館の協力の状況に関して調査した研究を調べると、公共図書館による、資料・目録データの提供、学校図書館の保護者ボランティアグループへの教育、訪問してきた児童や生徒へのプログラムの提供など、公共図書館側の一方的な支援がほとんどであった^{9), 10)}。このままでは、今後、公共図書館が学校図書館の教育的な役割まで責任を持ち業務を行うか、または何もできない限界の状況になる、という両極端の事態を予想する研究もある¹¹⁾。

こうした背景を踏まえ、学校図書館と公共図書館の新たな協力型プログラムを提案することを目的として研究を試みた。具体的には、まず、学校図書館と公共図書館の協力の現状を調査するとともに、学校図書館が求める協力の内容やあり方に関して検討した。また、公共図書館が学校図書館の要求に対していかに対応できるのかを調査した(第II章)。これらの調査に基づいて、学校図書館の要求だけではなく、公共図書館の状況を考慮した協力型プログラムを設計した。そして、設計したプログラムを実践した後、成果や課題を分析して改善点を考察した(第III章)。

なお、調査対象は釜山の学校図書館および公共図書館とした。釜山を研究対象として選んだ理由は、①2012年から釜山教育庁が学校図書館の支援事業に力を入れようとしているため、公共図書館と学校図書館の協力が良好な環境にあること、②研究を実施する研究者が所属する大学が同じ地域にあり、実践に直接参加ができること、である。さらに、釜山は第1表が示すように、学校図書館設置率と担当者の配置率が全国の平均とほとんど変わらないという特徴を持っており、調査対象として適していると判断した。

II. 韓国の学校図書館と公共図書館の現状調査

A. 調査方法

本研究では、現在の状況において可能な範囲での新たな協力型プログラムの方向性を検討する。そのために、まず、学校図書館や公共図書館の担当者に対する調査を行った。学校図書館に対しては、1) 運営や環境の状況、2) 読書教育や読書活動に対する状況、3) 公共図書館に求める支援の内容や方法、を調査した。一方、公共図書館に対しては、1) 学校図書館への支援の内容や方法、2) 学校図書館への支援を行う際の問題、3) 学校図書館への支援に対する意見、を調べた。このために、質問紙調査を行い、さらに、より詳細な分析のために、質問紙に回答した公共図書館担当者を対象に電話でのインタビューを試みた。

質問紙調査は2012年4月から6月まで、釜山市内の小学校・中学校・高校の学校図書館644館および公共図書館24館を対象にして行った(質問紙については付録1と付録2を参照)。学校図書館では508館から回答があり、その中で無回答項目が多かった7館を除き、501館(有効回答率77.8%)を分析した。その内訳は、小学校267館、中学校142館、高校81館、特殊学校11館である。公共図書館については24館(回答率100.0%)から回答があった。

電話インタビューは、現在、学校図書館に対する支援を行っている公共図書館の司書3人を対象として、質問紙に基づいて一人約30分間で行った。

B. 学校図書館の現状

学校図書館担当者への質問紙調査(付録1参照)を通じて、学校図書館の担当者の現状、重要

第2表 回答者の身分

職務	回答数 (館)	割合 (%)
図書館担当教員（司書教師以外）	414	82.6
司書教師	38	7.6
非常勤司書	35	7.0
その他	13	2.6
無回答	1	0.2
合計	501	100.0

第4表 図書館を担当している理由

	回答数 (館)	割合 (%)
業務分担による	371	74.1
自分の意思による	56	11.2
周りの勧めによる	3	0.6
その他	23	4.6
無回答	10	2.0
司書教師	38	7.6
合計	501	100.0

第3表 学校図書館担当経歴

	学校図書館を 担当した全経歴		現在の学校での 経歴	
	回答数 (館)	割合 (%)	回答数 (館)	割合 (%)
1年未満	59	11.8	75	15.0
1年以上～2年未満	134	26.7	194	38.7
2年以上～3年未満	88	17.6	102	20.4
3年以上～4年未満	80	16.0	71	14.2
4年以上～5年未満	33	6.6	20	4.0
5年以上	93	18.6	30	6.0
無回答	14	2.8	9	1.8
合計	501	100.0	501	100.0

第5表 学校図書館の開放時間および滞在時間

	開放時間		滞在時間	
	回答数 (館)	割合 (%)	回答数 (館)	割合 (%)
1時間未満	18	3.6	317	63.3
1時間以上～3時間未満	19	3.8	52	10.4
3時間以上～6時間未満	89	17.8	23	4.6
6時間以上～9時間未満	357	71.3	89	17.8
9時間以上	13	2.6	4	0.8
無回答	5	1.0	16	3.2
合計	501	100.0	501	100.0

な業務や強化が必要な役割、公共図書館との協力に関する考えなどを調べた。まず、回答者の身分に関して聞いた。その結果、図書館担当教員（「司書教師」¹²⁾以外）が82.6%でもっとも多く、司書教師7.6%、非常勤司書7.0%、その他2.6%、無回答0.2%であった（第2表参照）。釜山の場合、司書教師が配置された学校は38校で、38館すべてから回答があった。

学校図書館の担当経歴については、現在の学校を含め学校図書館を担当した年数の合計が5年未満の回答者が約80%であった。特に回答者の56.1%が3年未満の経歴であった（第3表参照）。すなわち、釜山における学校図書館担当者の半数以上は学校図書館の担当経歴が短いという現状であった。

学校図書館を担当している理由を質問したところ、「業務分担による」を回答したものが74.1%

でもっとも多く、次いで「自分の意思による」が11.2%であった（第4表参照）。

このように、学校図書館を担当する経験も少なく、自分の意思よりは業務分担として図書館を担当する場合が多かった。

学校図書館の開館時間に関する質問では、1日「6時間から9時間未満」を開館する学校図書館が71.3%でもっとも多かった（第5表左欄参照）。しかし、図書館担当者が図書館に滞在する時間は、「1時間未満」が63.3%でもっとも多く、「6時間から9時間未満」は17.8%であった（第5表右欄参照）。

70%以上の学校図書館が「6時間から9時間未満」図書館を開館すると答えたことから、図書館を開館している間に学校図書館担当者が不在の場合も多いことがわかる。この不在の間は、「保護者ボランティア」、「図書部の児童や生徒」などにより運営されていた。また、37.0%の学校では運

第6表 学校図書館担当者の非滞在時間の図書館滞在者

	回答数 (館)	割合 (%)
保護者ボランティア	360	72.5
児童や生徒による図書部	245	48.9
その他	98	19.5
特にない	185	37.0
合計	501	100.0

(重複回答有り)

第7表 学校図書館の重要機能および、今後、(より)強化が必要な機能

	重要機能		今後(より)強化が必要な機能	
	回答数 (館)	割合 (%)	回答数 (館)	割合 (%)
読書支援機能	464	92.2	323	64.5
教授学習センター機能	126	25.1	63	12.6
教科授業活用機能	98	19.6	47	9.4
余暇休息機能	93	18.6	28	5.6
文化センター機能	71	14.2	23	4.6
自律学習空間機能	107	21.3	12	2.4
情報文化センター機能	14	2.8	1	0.2
その他	2	0.4	3	0.6
無回答	0	0.0	1	0.2
合計	501	100.0	501	100.0

(重複回答有り)

営する人手が「特にない」と答え、図書館運営の最小限の要件も備えていない(第6表参照)。

学校図書館の重要な機能に関する質問では、92.2%が「読書支援機能」をもっとも重要な機能であると考えていた(第7表左欄参照)。また、今後、強化が必要であると考えている機能に関して尋ねた質問でも64.5%が「読書支援機能」であると回答した(第7表右欄参照)。

それでは、実際、学校図書館を中心にしてどのような読書教育が行われているのか。それに関して質問した結果、もっとも多く行っている読書教育活動は「朝の読書」で、77.8%が実施している

第8表 読書教育の形態

	回答数 (館)	割合 (%)
朝の読書	390	77.8
読書 Quiz	336	67.1
図書展示	90	18.0
読書討論	188	37.5
読書后感想文大会	192	38.3
読書関連授業	252	50.3
読書関連教員指導	180	35.9
読書教室および図書館体験教室運営	184	36.7
読書教育特別講義	53	10.6
その他	59	11.8
合計	501	100.0

(重複回答有り)

第9表 読書教育に関する児童や生徒の反応

	回答数 (館)	割合 (%)
全然関心がない	1	0.2
関心がない	25	5.0
普通	189	37.7
関心が高い	246	49.1
大変関心が高い	37	7.4
無回答	3	0.6
合計	501	100.0

と答えた。次いで「読書 Quiz」が67.1%、「読書関連授業」が50.3%の順であった(第8表参照)。

このような読書教育に関する児童や生徒の反応に関して調査した結果、「関心が高い」と答えた割合が49.1%でもっとも多く、「関心がない」または「全然関心がない」は合わせて5.2%であった(第9表参照)。回答者は、学校で行っている読書活動に関して児童や生徒の関心が高いと認識していた。

また、校種別で比較するために、「大変関心が高い」を5点、「全然関心がない」を1点にして、5件法での回答を点数化して計算を試みた。その結果、小学校は3.65点、中学校3.43点、高等学校が3.18点で、小学校の児童の方が読書教育に

韓国における学校図書館と公共図書館の協力型プログラムの開発：読書メンタリングプログラムを中心に

第10表 図書館運営に関する外部機関の支援の有無

		回答数 (館)	割合 (%)
もらったことがない		281	56.1
もらったことがある	公共図書館の支援	63	12.6
	他学校司書教師の支援	29	5.8
	他学校担当教員の支援	14	2.8
	その他	102	20.4
無回答		12	2.4
合計		501	100.0

第11表 学校図書館への公共図書館の支援の充実度

	回答数 (館)	割合 (%)
全く不足	47	9.4
不足	155	30.9
普通	223	44.5
充分	66	13.2
大変充分	6	1.2
無回答	4	0.8
合計	501	100.0

関して相対的に関心が高かった（全体の平均は3.59）。

以下は、公共図書館との協力や支援の状況および今後の希望に関する質問に対する結果についてである。図書館運営に関して、外部からの支援の有無を質問した結果、半数以上の学校（56.1%）が、「支援をもらったことがない」と回答した（第10表参照）。公共図書館から「支援をもらったことがある」という回答は12.6%であった。

公共図書館の学校図書館に対する支援が充分であるのか聞いた質問では、40.3%が「不十分である」と回答し、「充分である」と回答した割合は14.4%であった（第11表参照）。この数値から、支援が「不足」していると感じている傾向が読み取れる。

また、公共図書館が学校図書館を公的に支援するサービスを行っていることに関しても、66.8%が「知らなかった」と回答した（第12表左参

第12表 学校図書館に対する公共図書館の支援サービスの認識および希望の有無

支援サービスの認識	回答数 (館)	割合 (%)	支援サービスの希望	回答数 (館)	割合 (%)
知らない	335	66.8	希望する	324	64.7
知っている	166	33.2	希望しない	177	35.3
合計	501	100.0	合計	501	100.0

第13表 学校図書館が希望する支援の内容

項目	回答数 (館)	割合 (%)
読書教育および読書行事（司書の直接派遣）	321	64.1
資料選定および収集	176	35.1
図書の点検および廃棄	176	35.1
教育や特別講義のための講師の支援	184	36.7
図書館活用授業	133	26.5
資料の分類およびDB構築	111	22.1
図書館利用教育	56	11.2
巡回文庫および貸し出しサービス	75	15.0
DLS（学校図書館デジタルシステム）使用方法教育	50	10.0
ボランティアに対する教育支援	53	10.6
その他	9	1.76
合計	501	100.0

（重複回答有り）

照）。しかし、今後、公共図書館からの業務支援を希望するのかと聞いたところ、64.7%の学校図書館が「そうである」と回答していたことから、公共図書館の支援に関する認識度は低いものの要求は高いことが分かった（第12表右参照）。

希望する支援の内容に関して尋ねた結果、「担当司書を直接派遣して行う読書教育および読書行事」に対する希望が64.1%で、もっとも多かった。次いで、「教育や特別講義のための講師の支援」が36.7%であった（第13表参照）。

公共図書館と協力して行う読書教育の必要性に関する質問では、49.7%が「必要である」、12.6%が「大変必要である」と回答した（第14表参照）。多くの回答者が、公共図書館と協力して行う読書教育および読書活動が必要であると認識し

第14表 公共図書館と協力した読書教育の必要性

	回答数 (館)	割合 (%)
全く要らない	4	0.8
要らない	27	5.4
普通	157	31.3
必要	249	49.7
大変必要	63	12.6
無回答	1	0.2
合計	501	100.0

第16表 支援の障害要因

	支援有り (13館)		支援無し (11館)	
	回答数 (館)	割合 (%)	回答数 (館)	割合 (%)
人手不足	13	100.0	10	90.9
予算不足	7	53.8	6	54.5
資料不足	3	23.1	2	18.2
専門性不足	1	3.8	1	9.1
障害要因なし	0	0.0	0	0.0
合計	13	100.0	11	100.0

(重複回答有り)

第15表 公共図書館の学校図書館に対する支援の現状と今後の計画

現在の支援	回答数 (館)	割合 (%)	今後の計画	回答数 (館)	割合 (%)
支援有り	13	54.2	今後有り	12	92.3
			今後無し	1	7.7
			合計	13	100.0
支援無し	11	45.8	今後有り	2	18.2
			今後無し	9	81.8
			合計	11	100.0
合計	24	100.0	総合計	24	100.0

ていた。

小・中・高等学校別に比較するために、「大変必要である」を5点、「全く要らない」を1点で点数化して、上と同様に計算を行った。その結果、小学校の平均が3.73となり、中学校(3.63)や高等学校(3.26)より必要性を感じていた(全体の平均は3.68)。

C. 公共図書館の現状

学校図書館の要求に対応できる状況であるのかに関して、公共図書館に対して質問紙調査を行った(質問紙は付録2参照)。

現在、釜山では24館の公共図書館がある。本調査ではその24館すべてから回答を得た。また、より精細な現状を把握するために、インタビュー調査を加えた。

まず、学校図書館への支援の有無に関して質問した。その結果、学校図書館への「支援事業を

行っている」は54.2%であった(第15表左欄参照)。その中で「今後も支援を続ける予定である」と回答した図書館は92.3%で、「支援を続けない予定である」は7.7%であった(第15表右欄参照)。また、現在、「支援を行っていない」公共図書館は45.8%であり、その中で81.8%が「今後も支援の計画がない」と回答した。

次に、学校図書館を支援する上で障害となる要因に関して尋ねた。その結果、支援を行っている館のすべてが「人手不足」を障害要因として挙げていた(第16表左欄参照)。次いで、53.8%が「予算不足」を指摘していた。支援を行っていない図書館でも、障害要因は、支援を行っている図書館とほぼ同じ傾向を示した(第16表右欄参照)。

学校図書館を支援する業務の担当者や予算の現状を質問した。学校図書館を支援している館の中で92.3%は支援業務を担当する司書がいるが、7.7%は支援を担当する司書さえ指定していない状況であった(第17表参照)。担当者がいる館全体では合わせて30人の担当者がおり、1館平均2.5人の担当者が配置されていた。しかし、学校図書館支援業務を専門に担当しているのではなく、全員が他の業務と兼任していた。すなわち、学校図書館支援業務を行っている図書館でも、学校図書館支援だけを担当している担当者は一人もいなかった。

兼任している業務のうちの学校図書館支援業務

韓国における学校図書館と公共図書館の協力型プログラムの開発：読書メンタリングプログラムを中心に

第17表 学校図書館支援業務担当者の有無

	回答数 (館)	割合 (%)
支援業務だけを行う担当者	0	0.0
他の業務と兼任する担当者	12	92.3
(1人～2人)	(7)	(61.5)
(3人以上)	(5)	(30.8)
担当者なし	1	7.7
合計	13	100.0

第18表 担当者の学校図書館支援業務の比重

	回答数 (館)	割合 (%)
0～10%	9	69.2
11～20%	2	15.4
21～30%	1	7.7
担当者なし	12	7.7
合計	24	100.0

第19表 予算の配分

	回答数 (館)	割合 (%)
予算なし	6	46.2
500万ウォン未満	3	23.1
500万ウォン以上 1000万ウォン未満	1	7.7
1000万ウォン以上	1	7.7
無回答	2	15.4
合計	13	100.0

の比重は、全体の中で1割以下にすぎないと答えた回答館が69.2%でもっとも多かった(第18表参照)。

担当者だけではなく、予算のことで問題を抱えていた。46.2%の図書館が学校図書館を支援するための別の予算を取っていないと回答した(第19表参照)。もっとも多い予算をもっているN図書館の場合、約1000万ウォン(2015年2月現在で約100万円)の予算が配分されていた。

次に、学校図書館にどのような支援を行っているのかを明らかにするために、その支援内容に関して質問した。その結果、「巡回文庫や団体貸し

第20表 支援の内容

	回答数 (館)	割合 (%)
DLS 使用法教育	1	7.7
担当教員研修	1	7.7
図書館行事支援	5	38.5
図書館利用教育	7	53.8
巡回文庫や団体貸し出しサービス	8	61.5
司書派遣	0	0.0
合計	13	100.0

(重数回答有り)

第21表 学校図書館に対する支援の必要性および現実性

必要性			現実性		
	回答数 (館)	割合 (%)		回答数 (館)	割合 (%)
必要である	14	58.3	難しい	24	100.0
不必要	4	16.7	大丈夫	0	0.0
考えたことがない	6	25.0	考えたことがない	0	0.0
合計	24	100.0	合計	24	100.0

出しサービス」、「図書館利用教育」、「図書館行事支援」などの間接的な読書教育や図書館運営支援を行っていた(第20表参照)。

最後に、学校図書館への支援の必要性と現実的な支援可能性に関して聞いた。その結果、支援が不必要であると答えた割合は16.7%であったが、すべての図書館が、支援に関して現実的に難しいと回答した(第21表参照)。

D. 考察

学校図書館側の状況は以下の四点にまとめられる。第一に、学校図書館担当者の相当数が(学校図書館の)専門職ではない一般教員であるだけでなく、様々な業務の中の一つとして図書館を担当しているため、専門性や業務の持続性が確保されていない(第4表参照)。また、学校図書館担当者は学校図書館に滞在する時間が短く(第5表参照)、3割以上の学校では学校図書館を運営するための担当者さえ指定していなかった(第6表参

照)。第二に、多くの学校図書館担当者は、学校図書館の重要な機能として読書教育を挙げているにもかかわらず、実際にはその機能がうまく働いていないため、強化が必要であると考えていた(第7表参照)。第三に、学校図書館をより活発に活用するために、これまで以上に公共図書館の支援を求めている学校図書館が多かった(第12表と第14表参照)。第四に、希望する支援の内容はより専門的なもので、特に読書教育のための専門家の派遣を望んでいた(第13表参照)。

しかし、公共図書館側では、学校図書館に対する支援に関して問題を抱えていた。第一に、学校図書館の支援をするにあたって、人手不足や予算不足という障害要因があるため、多くの公共図書館が支援の難しさを吐露していた(第16表参照)。人手と予算の確保に関する問題は、以下のように公共図書館への電話インタビューでも指摘された。

学校図書館支援のためには図書館の人的・予算的問題から解決しなければならないと思います。現在の方式ではどうしても適切な支援ができない状況です(A図書館の担当者2012-6-12)。

この第一の問題のために、支援の内容も一方的で形式的なものに止まっている、という第二の問題も生じていた(第20表参照)。さらに、第三の問題として、学校図書館に対する支援の必要性に関しては肯定しているものの、現在の支援に関しては否定的な傾向があった(第21表参照)。支援に対する現実的な問題に関しては電話インタビュー調査でも指摘された。特に、公共図書館による学校図書館の環境改善に関して否定的な意見もあった。以下は電話インタビューからの引用である。

学校側の要求があるとしても現実的に支援をするのが不可能である。解決方法を公共図書館で探すことは唯一の答えではないと思う。公共図書館の司書を活用する方法以外の方策

を考えるのがより効率的で適切な方法であると思う(B図書館の担当者2012-6-12)。

業務が過重である司書にさらに他の業務を企画し実践させるのは、現実を無視した理想にすぎないと思う。学校図書館で読書教育に関する活動が必要であれば、自ら講師を採用するか司書教師を配置することが当たり前である(C図書館の担当者2012-6-21)。

以上の現状調査から、公共図書館が学校図書館を支援するにあたって障害となる要因があり、現在のように、公共図書館からの一方的な支援を要求することは難しい状況であることがわかった。

このような状況の下で、新たな協力型プログラムが必要とされている。新たな協力型プログラムは以下のような条件を満たす必要がある。

第一に、現在の学校図書館の担当者は学校図書館に対する専門性を備えておらず、学校図書館での滞在時間も短いため、公共図書館からの専門員の派遣が求められている。特に、読書教育に対する支援が求められている。

第二に、公共図書館は学校図書館を支援する必要性に関して肯定しているが、人手不足や予算不足の問題がある。また、学校図書館に関する専門性も持っていない。そこで、公共図書館の支援の下で、学校図書館や読書教育に関する専門性を備え、ボランティアとして活動できる人が必要とされている。

上記二つの条件を満たす支援方法の一つとして、大学の図書館情報学科に在学し、将来、司書を目指している学部生が参加する「読書メンタリングプログラム」を考案した。この「読書メンタリングプログラム」は、図書館情報学科の教員の指導や公共図書館の支援の下で学部生がメンターになり、学校図書館の施設や資料を活用して、メンティである児童や生徒に読書に対する指導や相談などを行う読書教育プログラムである。メンタリングプログラムの効果に関しては多数の研究論文が出ており、メンティの成績の向上、他人との関係形成の能力の増加、態度の変化などの側面で

韓国における学校図書館と公共図書館の協力型プログラムの開発：読書メンタリングプログラムを中心に

肯定的な効果があると言われている¹³⁾。大学の図書館情報学科が協力して行うプログラムであるため、公共図書館単独での支援による負担を最小化し、学校図書館が要望する読書教育支援ができる効果的な方案の一つになると期待できる。

III. 読書メンタリングプログラムの実践と分析

A. 調査の概要

前章で見た調査結果をもとに、新しい協力型プログラムを設計した。そして、プログラムを実践した後に成果や課題などを分析し、今後の現場での適用可能性について検討した。メンタリングプログラムを分析する方法は、大きく二つに分けられる。一つは、メンタリングプログラムの成果に関する研究であり、もう一つはプログラムの運営過程を分析してその成果に影響を及ぼす要因を検討するものである。そのためによく利用される研究方法が、アクションリサーチである。アクションリサーチは、現場をコントロールせずに実践を行い、そこから発生する問題やその解決方法を見つけて、現場の改善方策を模索するものである。アクションリサーチを提案したK. Lewinは、アクションリサーチは結果だけを求める研究ではなく、その結果に基づいて変化を引き出す、すなわち、実践を重視する研究であると主張した¹⁴⁾。そのためには、「計画－実践－観察－省察－再計画」という循環構造による研究が必要であるとしている。具体的には、研究者が研究の参加者の一人として加わり、積極的に研究実践や結果に対する解釈や理解を行う。そこから、その反省や考察をもとに、次の段階の再計画を行うものである¹⁵⁾。本研究では「計画－実践－観察－省察－再計画」というアクションリサーチの循環構造に基づき、プログラムの計画から終了までの過程、指導の内容及方法、終了後の反応や効果などを述べ、課題を明らかにして、今後の実践計画に関して論じる。

また、アクションリサーチの場合、分析方法として実験者の認識やそれらの意味を理解することを重視する質的な研究方法が良く利用されている^{16),17)}。分析のために利用される資料は観察やインタビューによる記録、日誌の記録、開放型の質問紙などがある。

このような質的な分析方法を主とするアクションリサーチは、現場と密着し、より良い実践を目標とする研究方式として一つの研究領域を成している¹⁸⁾。

本研究における学校図書館を対象にした新たな協力型プログラムの実践は、2012年6月から2014年8月まで、釜山にある9校の小学校を対象にして行った(2012年3校、2013年2校、2014年4校)。プログラムを実践した回数は学校によって異なり、合わせて34回のプログラムを実践した。プログラムの計画と実践の詳細は本章B節とC節で説明する。

具体的には、活動内容の分析を、以下の調査に基づいて行った。

調査1: 小学校側に関する調査

調査1-1: プログラムに参加したメンティ(児童)の感想文の分析

調査1-2: 参加した小学校の教員および学校図書館担当者に対するインタビューや反応調査

調査2: 大学側に関する調査

調査2-1: プログラムの運営者であるメンター(学部生)が作成した活動日誌(毎回の活動後の感想の記録)の分析や簡単な質問項目を用いたメンターに対するインタビュー調査

調査2-2: プログラムの運営者を指導したスーパーバイザー(大学教員)に対するインタビュー調査

調査3: 公共図書館側に関する調査

調査3-1: プログラムを全般的に管理したメンタリング管理者(公共図書館)に対するインタビュー調査

B. 計画および準備

メンタリングは、経験者であるメンターが、経験の少ないメンティに対して助言、相談、支援などを提供するために関係を形成することである¹⁹⁾。特に、最近では、人間の成長や指導のための効果的な方法として関心を集めており、教育学の領域

で児童や青少年のための教育モデルの一つとして注目されている²⁰⁾。

このようなメンタリングプログラムを読書教育の一つとして活用しようとする動きも現れている。例えば、2005年から2008年まで実施された、ソウルの教育庁が運営したメンタリングプログラムでは、学校図書館でボランティアとして活動している保護者をメンターとして、低所得層の子どもの読書を指導した²¹⁾。プログラムを運営した結果、学校図書館の活用度が高くなり、子どもの読書に対する好感度が増加した。しかし、メンターが図書館や読書に対する専門知識が無い保護者で構成されていたため、図書の選択、指導方法や内容の専門性が保障できないという問題があった。一方、学習能力および読書力が平均より低いと判断されている中学生を対象にして、学部生メンターによる読書指導を行った事例もある²²⁾。この事例においては、プログラムの実施によって、生徒の読書力や理解力が増加したと分析されており、また、体系的・直接的に教科内容を伝達できる学部生メンタリングプログラムを活性化すると、学習能力不足の生徒や学習障害をもつ生徒に活用できると主張されている。

メンタリングを一つのプログラムとして効果的に行うためにはメンター、メンティ以外に、メンタリングを全般的に運営し管理するメンタリング管理者と、メンタリング活動を評価し今後の改善を求めるスーパーバイザーが必要である^{23), 24)}。そこで、本研究では、公共図書館がメンタリング管理者を、大学教員がスーパーバイザーを担当し、学部生をメンター、児童をメンティとしてプログラムを構成した。

まず、釜山市立市民図書館をメンタリング管理者とした。メンタリング管理者は、「読書メンタリングプログラム」に参加する地域の学校図書館の選別、メンターとの連携、メンターに対するワークショップの実施など、プログラム全体の企画や運営を統括した。

活動に参加するメンターに対するワークショップは、釜山市立市民図書館の主催により毎年3回ずつ行った。メンターは、1回目、活動を行う

予定である小学校の図書館担当者²⁵⁾から学校図書館の現状と現在行っている読書活動に関して説明を聞き、児童の特徴および教授方法、注意事項などに関して訓練を受けた。2回目では、学校図書館司書教師から読書教育に関連する具体的な事例と事例別の効果、またプログラムの設計方法などに関して教育を受けた。3回目では、釜山市立市民図書館で行っている「子ども読書教室」に参加し実務訓練を受けた。

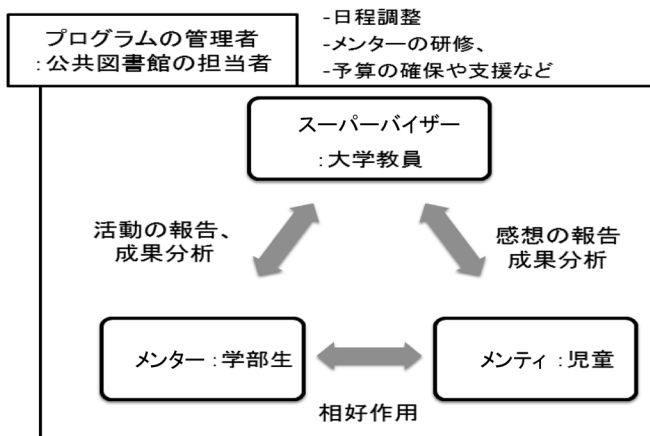
スーパーバイザーである大学教員は、釜山の2つの大学(D大学とP大学)に所属する2名である。彼らは、メンターの募集やプログラムの内容設計などの準備からプログラムの評価まで、直接に「読書メンタリングプログラム」に参加し指導を行った。メンターとしての学部生は、2つの大学から98人(2012年51人、2013年24人、2014年23人)が自主的に参加した²⁶⁾(第1図参照)。

その後、以下の順でメンタリングプログラムを準備した。第一に、児童の関心分野や読書活動に対する基礎的な情報を収集し、全体の読書テーマを決めた。第二に、図書館で収集した図書目録、学校図書館司書教師の推薦図書、それに優秀な子ども図書賞²⁷⁾の図書目録を収集して資料に対する検討を行い、予備図書目録を作成した。第三に、予備図書目録の中で、読書テーマとメンティのレベルや興味を考慮して主要な資料を選別した。第四に、指導案を作成し、スーパーバイザーである大学教員と学校図書館担当教員に内容の適合性を検討してもらった。第五に、現場に出る前に練習を行い、プログラムの時間や内容をチェックするなど、突発的に発生する状況に備えた(この作業は年ごとに行われた)。

C. 実践

プログラムを実践する小学校として、釜山教育庁の推薦やメンタリングに興味をもち協力ができると公共図書館が判断した9校を選定した。

9つの小学校の状況や希望により、それぞれ異なる形式や時期でメンタリングプログラムを実施した。A～H校は、児童が読書に興味を持った



第1図 メンタリングプログラムの仕組みと役割

めの一つのイベントとしての読書プログラムを希望したのに対して、I校は、正式の授業の一環として行う土曜スクールの形式を希望した。そこで、A～H校に対しては「読書キャンプ」という名前を付けて、2～3日間に行われる一時的なプログラムを準備した。また、I校に対しては土曜日の午前を利用して連続的で定期的なプログラムを用意した。学校側は希望する児童数と日を指定し、読書プログラムの内容や時間数についてはメンターグループが決定した。

メンティの募集はメンタリングプログラムが始まる約3ヶ月前に行った。学校図書館担当者がすべての児童を対象に「読書メンタリングプログラム」を紹介した後、メンティとして参加するかどうかは児童が自由に決めるようにした。

A～H校については、メンターが3つのグループに分かれ（1グループ7～10人で構成）、1回ずつのプログラムを担当した。メンティとして参加したのは、A校が1年生から6年生までの学年で構成された30人、B校が2年生15人、C校が4年生から6年生までの30人、D校が6年生40人、E校が3年から4年生までの20人、F校が1年生から4年生までの20人、G校が1年生から6年生までの20人、H校が5年生80人（40人ごとに2つのグループに分けて実施）である。I校では、毎週土曜日に7～8人のメンター

（7回合わせて30人）と30人以内のメンティが参加し、低学年（1～2年生）、中学年（3～4年生）、高学年（5～6年生）にグループを分けて活動を行った（第22表参照）。

「読書メンタリングプログラム」は大きく3段階で構成した。まず、プログラムで扱う読書資料に関してメンティの関心を生み出す時間を持ち（開始）、次に、メンターが読み聞かせを行うかまたはメンティ自身と一緒に本を読むようにして（展開）、最後に、読んだ資料をもとに読書後の多様な活動を行った（終了）。例えば、読書後の活動は、①歴史に関する読書の後に、「もし、自分が過去の人なら、何をしているのか」を一つの文で書いて発表する、②昔話を読んだ後で、自分だけの物語をつくる、③環境問題に関して読んだ後で、リサイクル体験をする、④韓国の伝統的な遊びの方法に関して読んだ後で、遊びのオリンピックを開催する、⑤将来の職業に関する資料を読んだ後で、自分だけの職業事典および名刺をつくる、などである。

1回のメンタリングは2時間で構成し、50分に10分の休憩を入れた。第23表はA校で行ったプログラムの一例である。

毎回、プログラムの実践が終わったらスーパーバイザーとメンター、学校図書館担当者が一緒に「省察の時間」を持ち、次の実践にその結果を反

第22表 読書メンタリングプログラム参加学校の特徴

	学年	数(人)	類型	活動回数	場所
A	1～6	30	読書キャンプ	3	図書館
B	2	15	読書キャンプ	3	教室
C	4～6	30	読書キャンプ	3	図書館
D	6	40	読書キャンプ	3	図書館
E	3～4	20	読書キャンプ	3	図書館
F	1～4	20	読書キャンプ	3	図書館
G	1～6	20	読書キャンプ	3	図書館
H	5	80	読書キャンプ	6	図書館 & 教室
I	1～6	30(以内)	土曜スクール	7	図書館

第23表 A校の第2回目の読書メンタリングプログラム

目標：未来の夢に関して考えてみる。多様な職業に関して調べてみる			
主な資料：『一冊で分かる絵職業事典』、『図書館に隠れている職業の話』など			
段階	時間(分)	内容	方法
開始	5	挨拶と自己紹介	児童主導
	3	学習目標の説明	
展開	5	今日の資料に対する紹介	講義形式
	20	メンターと一緒に本を読む	
	7	本に関する Quiz	
	10	(休憩)	児童主導
	10	様々な職業に関する視聴覚資料に対する感想	
	10	職業の種類に関する調べ	
	20	将来希望する職業を決め、名刺づくり	
終了	10	名刺に関する発表	

映するようにした。

D. 活動内容の分析

調査の結果は、三つに分けて分析した。まず、プログラムに参加した小学校側を対象にした調査結果をまとめて分析した(A節の最後に示した調査1)。二つ目に、大学側に対する調査結果をまとめて分析した(調査2)。最後に公共図書館側を対象にした調査結果を分析した(調査3)。

1. 小学校側に関する調査の分析

a. メンティ(児童)

プログラムの評価のために、プログラムに参加したすべてのメンティに、プログラムの最終日に

プログラムに対する感想文を書いてもらった(第24表参照)。また、プログラムを実施する時、メンティの反応や行動をメンターやスーパーバイザーが観察して記録した。その結果としては、「読書が面白くなった」、「図書館の利用がより楽しくなった」などの反応が多かった。また、メンターとの関係に関して語ったメンティが多かった。しかし、授業の内容や関連活動に関する不満があったこともメンターの観察記録からわかった。

b. 学校図書館担当者

学校図書館担当者に対して4つの項目に分けてプログラムに関して評価をしてもらった(第25表参照)。項目は「プログラムに全般的に満足し

第24表 小学校側のメンティの意見

肯定的な 反応	メンターに ついて	男の先生の話が面白く、授業も面白かった（C校メンティ 2013-7-23）。
		授業でクマが出てくる面白いアニメもみた。クマが危ないことが良く分かった（D校メンティ 2013-7-19）。
		うちのグループを指導した先生がすごく優しかったので電話番号を聞いた。たびたび、連絡をする予定である（H校メンティ 2014-7-12）。
	内容について	先生から本を読んでもらった。また、関連する本も紹介してもらって良かったと思う（C校メンティ 2013-7-23）。
		リサイクルに関する本を読んで、その後、リサイクルに関して体験を行って、面白かった。今後、リサイクルが上手くできると思った（B校メンティ 2012-8-10）。
		歴史は前から好きだったが、関連した本を読んでより面白くなった。よく答えてアメ玉ももらい嬉しかった（H校メンティ 2014-7-12）。
否定的な 反応	メンティの 態度について	本に関して話合いを行う時、子どもの間での争いが多く、困ったことがたびたびあった（D大学メンター 2013-5-20）。
		今日はメンティの一人が急に教室から出ていった。後で理由を聞いたら、本の内容をもう分かっていたから、出ていったらしい（D大学メンター 2012-7-31）。
		読書後、本の内容と関連した様々な活動を準備したが、予想したより興味を持たない子どもが少なくなかった（D大学メンター 2012-7-31）。

たか]、「プログラムに参加したメンティの関心は高かったか」、「プログラムは読書教育として効果的だったと思うか」、「今後また、プログラムに参加することを希望するか」である。各項目に対しては5件法で回答を設定し、「大変そうである」の場合に5点、「全然そうではない」の場合を1点に得点化した。この回答については、G,F校以外の7つの学校から得ることができた。また、プログラムに関する感想を口述してもらった。その結果、9校の平均値は、満足度が4.6点、メンティの関心度が4.8点、読書教育としての効果は4.1点であった。また、今後のメンタリングプログラムへの参加希望は4.7点であり、メンタリングプログラムに対する評価が肯定的であった。

プログラムに関する感想では、プログラムの運営の全般に関して肯定的な意見が多かったが、メンターのメンティに対するコントロール能力が足りないという否定的な意見もあった（第26表参照）。

2. 大学側に関する調査の分析

a. メンター（学部生）

プログラムに参加したメンターに、毎回の活動後の感想を記録（活動日誌）してもらった。活動

日誌の内容は、プログラムを通じて①得られたと思う点（成果）、②反省や改善点などである。また、簡単な質問項目を用いて、メンターに対してインタビュー調査を行った。活動日誌とインタビューとを通じて、メンタリングプログラムの運営がメンターにも肯定的な影響を与えたことがわかった。かれらは図書館での読書教育の重要性に関してもう一度考える機会を得て、未来の司書としての態度や力量を検討するようになったと語っていた。しかし、メンティのレベルに合わないプログラムを準備したこと、メンティをコントロールできなかったことなどの反省もあった（第27表参照）。

D大学のメンター（68人）を対象にして、活動後に「読書教育の重要性を感じたか」と「今後、読書教育に関する力量を備えるために努力する予定であるか」の質問を中心にインタビューを行った。その結果、全員が読書教育の重要性を感じたと回答した。また、それに関する自分の力量が不十分であると評価し、今後、力量を上げるために努力すると回答した学生も94.1%（64人）いた（第28表参照）。

b. スーパーバイザー（大学教員）

メンターを指導したスーパーバイザーに対する

第 25 表 学校図書館担当者の評価

学校	プログラムの満足度	メンティの関心度	読書教育としての効果性	今後の参加希望度
A	5	5	4	5
B	4	5	4	4
C	5	5	5	5
D	3	4	3	4
E	5	5	4	5
H	5	5	4	5
I	5	5	5	5
平均	4.6	4.8	4.1	4.7

第 26 表 学校図書館担当者の意見

肯定的な意見	最初はメンタリングに関して疑問や不安を持っていた。しかし、メンターとプログラムに関して事前準備をしながらだんだんその心配がなくなった (A 校の担当者 2012-7-31)。
	自分の仕事の妨げになるのではないかと心配していたが、活動が終わってから、校長や教員に学校図書館での読書教育の必要性や重要性がより認識され、自分の役割がより拡大され、注目されるようになった (B 校の担当者 2012-8-10)。
	学校図書館の活用の重要性がより認識され、学校図書館を活用した授業計画を立てるようになるなど肯定的な効果があった (C 校の担当者 2013-7-23)。
	プログラム後、児童の要請により、学校図書館ではメンタリングで活用した資料のコーナーを作り、関連資料や推薦資料を配置するようになった。また、関連資料だけではなくそれ以外の資料に対しても貸し出しが確実に増えた (D 校の担当者 2013-7-19)。
	途中で参加したいと希望する児童が多かったため、もう一回、メンティを募集するようになった。メンティの数が決まっていたため、クラス別に 2～3 人までの参加を原則にする新しい規則も作ることになった (I 校の担当者 2012-11-20)。
否定的な意見	子どもに対するコントロール能力が足りないと思う。特に、突発的な状況に対応ができなかったのが残念である (B 校の担当者 2012-8-10)。
	本が児童のレベルに合わない場合もあったと思う。今後、より検討が必要であろう (A 校の担当者 2012-7-31, I 校の担当者 2012-11-20)。

インタビュー調査した結果、現場での実習により学生の実務能力を育てる機会になったことが一番の成果であったと評価していることがわかった。以下は P 大学のスーパーバイザーへのインタビューからの引用である。

うちの学校では毎年、ボランティアとして学校図書館の本の整理や目録づくりなどの活動を行っていた。もちろん、それらの仕事も重要であるが、本の整理が終わった後、何かむなしと語った学生が多かった。今回の活動により、直接に児童と会い指導や相談を行っ

たことで働きがいがあった、面白かった、もっと読書教育に関して勉強したいと語った学生が多くなり満足である (P 大学教員 2012-11-12)。

また、研究的な面でも肯定的な影響があったと語る人もいた。以下は D 大学のスーパーバイザーへのインタビューからの引用である。

読書教育プログラムに適切な内容の開発や結果の分析など、プログラムと直接関係する研究だけではなく、図書館協力に関してより

第27表 メンターの意見

得られた成果	初めは怖かった。大学で読書教育に関する講義を受けていたが、実践ができるかどうか疑問だった。しかし、プログラムが終了今は、図書館での行う自分の役割に関して少しは理解するようになったと思う（D 大学メンターの活動日誌 2012-7-7）。
	学校図書館の魅力を感じた。今後、学校図書館で読書教育を行う仕事をしたいと思った。そのため、次回もぜひメンターとして参加する予定である（D 大学メンターの活動日誌 2012-7-31）。
	本を読んだ後、関連する映像資料を見せた。その後、グループに分けて話し合いの時間を持った。映像資料の感想は本の内容の理解度を高めて、子どもの集中力を高める方法であった（D 大学メンターの活動日誌 2013-5-12）。
	本を読んだり発表をするとアメ玉をあげた。最初は、アメ玉を配るのに時間が掛かりすぎるぐらい、皆の興味がアメ玉そのものにあった。しかし、ある程度時間が過ぎたら、アメ玉と共に本の主人公や中身にも関心を傾ける様子が観察できた（D 大学メンターの活動日誌 2013-5-12）。
	児童や学校図書館担当教員などが私たちのことを“先生”と呼んでくれて嬉しかった。プログラムが終る時の褒め言葉が、力になった（D 大学メンターの活動日記 2014-8-12）。
反省および改善点	私が担当したプログラムでは、一クラスに40人以上の児童が集まっていた。児童が多かったためなのか、他の学校とは違い、児童の集中力が低く、児童をプログラムに集中させるのに時間がずいぶん掛かってしまった。今後、一クラスに人数の制限が必要であると思った（D 大学メンターの活動日記 2013-8-12）。
	本を読んでその内容に関して話し合いを行った。最初はスムーズにお互い意見を語っていたが、だんだんそれが感情的な争いになった。コントロールする方法も分からなかったため、どうすればよいのか判断ができなかった（D 大学メンターの活動日記 2013-5-19）。
	私が担当した学校の場合、1年から6年までの多様な児童と一緒にプログラムに参加していた。そのため、児童別のレベルが上手く反映できなかった。また、考えたより、児童のレベルが高くて驚いた（D 大学メンターの活動日記 2012-7-31）。
	プログラムを運営する途中、学校図書館担当の先生がプログラムに関して口を出した。‘それはしなくて良い’とか、‘本を読む時間をもっととりなさい’など。その後、メンティも私の話を信頼しなくなったような気がした（D 大学メンターの活動日記 2014-8-12）。
	プログラムを行う前に、学校図書館の担当者に本やパソコンなどの準備をお願いしていた。しかし、全然、備品の準備ができてなかったため、困ったことが何回もある。学校側の協力も、プログラムに影響を与える要因の一つであると思う（D 大学メンターの活動日記 2014-8-12）。

第28表 今後の読書教育に対する力量育成に関する考え

項目	回答数 (人)	割合 (%)
力量育成の必要性有り	64	94.1
力量育成の必要性無し	0	0.0
よく分からない	4	5.9
合計	68	100.0

もメンタリングプログラムに関して肯定的であった。人手不足の問題を解決できたとともに、新しい専門家を養成することにも協力できたと満足していた。また、大学との協力により新たなプログラムを開発できるようになったことが成果であると評価していた。

以上の結果をまとめると第2図のようになる。

多様な観点からの研究の必要性も感じており、実際、論文も書いている（D 大学教員 2012-11-12）。

E. 考察

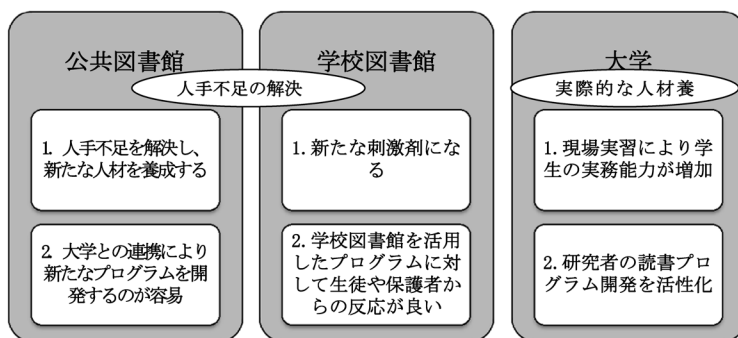
ここでは、メンタリングプログラムへの肯定的な評価の要因と、今後、より効果的なプログラムにするための考察を行う。

3. 公共図書館側に関する調査の分析

メンタリング管理者（公共図書館）からの反応

1. 成果の要因

メンタリング活動の中で特に効果的であった要



第2図 3つの機関での成果

因を分析した。

第一に、メンティはメンターとの本に関する対話で気楽に気持ちや考えを共有する時間を持てたことが、読書に対する肯定的な態度を生み出したと考えられる(第24表参照)。一般的にメンタリングはメンターとメンティの相互作用により、お互いに肯定的な影響を与えるというダブルインパクト効果を基盤にしている²⁸⁾。メンティは本を読むというよりメンターと本に関する対話をしながら気持ちや考えを共有し、関心をもってもらうという情緒的な相互作用を特に喜んでた。また、このような相互作用はメンターにも肯定的な影響を与えた(第27, 28表参照)。以下はメンターの活動日誌からの引用である。

本を読んだ後に、児童らはお互い自分の意見を交換していた。また、私が集中して聞いていることに気がついたら、より活発に自分の意見などを話していた。子どもの立場で考えることができ個人的にも役にたった時間であった(D大学メンターの活動日誌2012-7-31)。

第二に、メンティの興味を引き出すために文字資料以外の視聴覚資料などを活用したことが効果的であった(第24, 27表参照)。このことはD, P大学、両方のメンターの活動日誌や彼らへのインタビューから明らかである。視聴覚資料などの映像メディアは、文字に比べて具体性がより高いた

め、特に、年齢や学習能力が低い学習者の理解や感心を引き出すためによく利用される教育メディアである²⁹⁾。今回のメンタリングプログラムでも、本に対する関心や理解度を高めるための方法として視聴覚資料を活用したことが、肯定的な成果の要因であったと考えられる。以下はメンターの活動日誌からの引用である。

本に対する関心はあったが、集中力と興味が高いことに気付いた。本を読んだ後、関連する映像資料を見せた。その後、グループに分けて話し会の時間を持った。映像資料の感想は本の内容の理解度を高めて、子どもの集中力を高める方法であった(D大学メンターの活動日誌2013-5-12)。

第三に、メンティの集中力を引き出すためにごほうびを利用したことが読書興味を高めた要因であった(第27表参照)。メンターはメンティの積極的な参加を引き出すために、読書後の活動が終わった後、メンティに簡単なごほうびを配った。メンティの集中力を高めた方法をメンターに聞いたところ、物質的なごほうびが必要であると答えていた。ごほうびはメンティの読書活動の重要な動機になっていたが、プログラムを実施するうちに、メンティは読書に対する楽しみを感じていたようである。以下はメンターの活動日誌からの引用である。

韓国における学校図書館と公共図書館の協力型プログラムの開発：読書メンタリングプログラムを中心に

本を読んだり発表をするとアメ玉をあげた。最初は、アメ玉を配るのに時間が掛かりすぎるぐらい、皆の興味がアメそのものにあった。しかし、ある程度時間が過ぎたら、アメと共に本の主人公や中身にも関心を傾ける様子が観察できた（D 大学メンターの活動日誌 2013-5-12）。

第四に、学校図書館担当者の関心や協力がメンタリングプログラムに対する肯定的な評価の要因であった（第 27 表参照）。特に、プログラムを行う前に、学校図書館の担当者が、メンターとの話し合いをもったり、プログラムの実行に必要なものを徹底的に準備していた場合、よりプログラムがスムーズに運営できたとメンターは語っていた。また、学校図書館担当者の積極的な態度や行動は、学校側が読書メンタリングや学校図書館に対して肯定的なイメージを作ることに影響を与えていた。そのような学校では、メンティがメンタリングに対して肯定的な反応を示し、校長や教員が学校図書館での読書教育の必要性や重要性をより認識するようになり、学校図書館担当者の役割がより拡大され注目されるようになったと語った（第 26 表参照）。

2. 課題

前項で見た肯定的な反応以外に、否定的な反応もあり、今後、改善が求められる課題も明らかになった。

まず、十分に準備をしたにもかかわらず、メンタリングを実践した結果、メンティのレベルに合わない資料や興味がない資料も選定していたことが判明した。特に、同じ学年で構成されていた B, D, H 校以外、様々な学年のメンティが参加した学校では、読む速度の差、読解力の差などで効果的な読書活動ができない場合もあった（第 26, 27 表参照）。

第二に、プログラムの運営にも未熟な面があった。メンターがプログラムを運営するのにもっとも難しかったこととして、メンティの突発行動が挙げられた。最悪の場合は、何も言わずに教室か

ら出ていった子どもがあり、困ったこともあった。メンターは活動日誌に以下のように語っていた（第 24, 27 表参照）。

ある子どもが、他の子どもの邪魔をして、途中で教室を出ていった。悪戯だろうと思いき、すぐ戻ると思ったが、家に帰っていった。このような状況は初めてだったので、とまどった。（P 大学メンターの活動日誌 2012-7-31）

第三に、学校によってメンターとメンティの割合が異なることもプログラムの運営に影響を与えていた。例えば、D 校と H 校の場合、40 人のメンティに対して 5～7 人のメンターがプログラムを運営した（第 22 表参照）。一人のメンターが担当するメンティの数が多かったため、プログラムの実行が上手くできず、メンターとメンティの相互作用にも限界があった（第 27 表参照）。

最後に、学校側の認識の問題があった。「読書メンタリングプログラム」は学校図書館の支援プログラムであるにもかかわらず、学校図書館の利用ができなかったため、プログラムがうまく運営できない場合もあった。また、メンターが授業を行う途中で、教員がいきなり授業に飛び込むなどの場合もあった。プログラムの趣旨に関して、学校の担当者への説明や理解をより強化する必要がある（第 26, 27 表参照）。

3. 今後の改善点

今後、より効果的なメンタリングプログラムを実施するためには、以下のような改善点を検討する必要がある。

第一に、メンティの特性をより徹底的に反映させる必要がある。今回実行したメンタリングプログラムでは、本と活動の内容を決める際に学年別のレベルを反映させたが、メンティの特性やニーズなどは検討していなかった。しかし、メンティの間には彼らの性格、読書への関心、環境的な特徴などにより、大きな差が見られた。例えば、同じ学年の場合でも、A 校と B 校のメンティの読

書力や読書後の活動に関する理解度などに差があった。このような差は、同じ学校の同学年の間でも発生していた。今後、メンタリングを行う前に、学校側に協力してもらい、メンティに対する基礎的なデータを収集し、メンティのニーズやレベルに合わせた読書資料や活動内容でプログラムを構成する必要がある。

第二に、メンターに対する教育と訓練を強化する必要がある。先行研究や類似の事例の分析を通じて、メンタリングプログラムを運営するためにはメンターの能力や態度が何より重要であると判断し、活動の前にワークショップや個人指導などを行い、メンターの力量を高めるように努力した。しかし、メンターはワークショップなどで学んだ知識を実務に適用する能力に乏しく、メンティの突発行動や否定的な態度に立ち向う能力も低かったことが明らかになった（第27表参照）。そこで、企画指導案の作成や効果的な運営方法などに対するより直接的で実務的な教育を行うように、メンターに対する教育内容を改善しなければならない。特に、実務能力を身につけるために、プログラムの内容を理解し、練習するのに十分な時間を確保することが重要である。

第三に、メンタリングプログラムを持続して運用するために、より多様な類型の学校現場に適用し、その結果をもとにマニュアル（ガイドブック）を作る必要があると考えられる。3年間のメンタリングプログラムを運営した学校間には、それぞれの要因により差があった。例えば、学校図書館の施設や資料、メンティの関心やレベル、他の読書教育プログラムの参加有無などの要因により、異なる傾向が見られた。メンタリングプログラムは、それぞれの特徴に合わせて行うことによって、その効果がより高まるものである。したがって、今回得られた経験的な知識だけでなく、今後、実行するプログラムの内容も体系的に記録し、多様な状況や環境で適用できるマニュアルを開発することが有意義である。マニュアルには、司書教師や学校図書館担当者の配置の有無、児童のレベルや関心、興味など、学校図書館の状況を確認した上で効果的なメンタリングプログラ

ムを設計・運営する方法などの戦略を示す必要がある。

最後に、メンタリングの安定的な運営のために、参加機関の協力を強化する必要性を感じた。前述したように、メンタリングの趣旨をよく理解できなかった学校もあり、プログラムの運営に問題が発生していた。メンタリングプログラムを持続するためには運営協力体制が必要である。運営協力体制には地域の公共図書館と学校図書館担当者、学校管理者、保護者、大学教員（研究者）が参加する方式が考えられる。

IV. 結 論

現在、韓国では学校図書館の運営や読書教育に関して、地域の公共図書館に支援を求める学校が増えているにもかかわらず、様々な業務をかかえている公共図書館が積極的に学校図書館に支援を行うことは難しい状況にある。調査対象であった釜山の状況も同様であり、新たな協力型モデルの開発が必要であった。

そこで、質問紙調査をもとにして、効果的なプログラムの開発について研究を行った。調査の結果、新たな協力型プログラムには以下のような条件が必要とされることが明らかになった。第一に、学校図書館は読書教育を行う専門員を派遣してもらわなければならない。第二に、公共図書館は人手や予算が不足しているため、学校図書館への支援担当者として、専門的な知識を備え、ボランティアとして活動できる人が必要となる。これらの条件を検討し、新しい協力型プログラムとして、大学で図書館情報学を専攻している学部生を活用する「読書メンタリングプログラム」を提案した。

「読書メンタリングプログラム」は、準備から実践まで短い時間だったが、公共図書館と学校図書館だけでなく、メンターであった学部生にとっても有意義な成果が得られた。特に、学校図書館に対する公共図書館の支援が現実的に難しい状況の中で、その「協力」可能性を確認したということの意味があった。また、改善すべき問題点として、メンティに対するニーズ分析、メンターの

韓国における学校図書館と公共図書館の協力型プログラムの開発：読書メンタリングプログラムを中心に

教育内容の強化、メンタリングプログラムのマニュアルの開発、メンタリングプログラムを持続するための運営協力体制を検討した。

謝 辞

本稿執筆にあたり、ご指導いただいた筑波大学図書館情報メディア研究科の緑川信之教授に心より感謝いたします。いつも有難うございます。

注・引用文献

- 1) 韓国国立中央図書館。“図書館協力の概要”。韓国国立中央図書館。http://www.nl.go.kr/together/c1/page1_1.jsp, (入手 2014-03-10)。
- 2) Evans, G. E. Developing and Library and Information Center Collections. 3rd ed., Englewood: Libraries Unlimited, 1995, 472p.
- 3) Kwon, Eun-Kyung; Kim, Jong-Sung. An Analysis on the tasks of a school library support center: A case study of JungBu Public Library of Ulsan Metropolitan City. Journal of Korean Library and Information Science Society. 2010, vol. 41, no. 3, p. 225-248. (韓国語)
- 4) Noh, Dong-Jo; Song, Yu-Ahn. A study on librarians' recognition and preference for cultural programs between school and public libraries. Journal of Korean Biblia. 2011, vol. 22, no. 4, p. 275-299. (韓国語)
- 5) 教育科学技術府。学校図書館振興基本計画。教育科学技術府, 2008, 22p. (韓国語)
「韓国学校図書館振興基本計画」は「韓国学校図書館振興法施行令」により立案・実行されるものであり、第1次の実行は2008年から2013年までである。推進計画は、①利用サービスの拡大、②図書館基本力量の強化、③学校図書館振興体系の強化、④学校図書館ネットワークの構築、であった。その中で、公共図書館との連携は④に該当する。
- 6) これらの動きは特に、ソウルを中心に行われている。正読図書館。“学校図書館支援業務”。正読図書館。http://jdlib.sen.go.kr/contentsPage.do?boardId=JD_]01&pageName=jd/new/support/J01.jsp, (入手 2014-03-10)。
- 7) Kargbo, John Abdul. A rationale for public and school library cooperation in Sierra Leone. Public Library Quarterly. 2008, vol. 27, no. 2, p. 157-166.
- 8) 「韓国学校図書館振興法」の第12条2項によると「学校図書館では司書教師、実務教員、司書など

を置くことができる」と述べており、必ずしも学校図書館担当者を配置することが義務化されていない。

- 9) Song, Gi-Ho; Lee, Byeong-Ki. A study on the activating models for community services based on Linking School Libraries and Public Libraries, Seoul: The National Library of Korea, 2011. (韓国語)
- 10) Song, Gi-Ho. School Library Management. 4th ed., Seoul: Korean Library Association, 2012, 679p. (韓国語)
- 11) Cha, Mi-Kyung et al. A Basic Study on the Second Activation Policies of Libraries in Korea, Seoul: Korea Ministry of Education and Human Resources Development, Korea Education and Research Information Service, 2006. (韓国語)
- 12) 司書教師は日本の司書教諭に当たるものである。
- 13) Frecknall, Peter; Luks, Alan. An evaluation of parental assessment of the Big Brothers/Big Sisters Program in New York City. Adolescence. 1992, vol. 27, no. 1, p. 715-719.
- 14) Lewin, K. Action research and minority problems. Journal of Social Issues. 1946, vol. 2, no. 4, p. 34-46.
- 15) アクションリサーチは3つの条件が必要にされる。1. 研究者がに直接、実験に参加すること、2. 省察から再計画や実践まで厳密に連携すること、3. 研究結果に関心がある人と共有することである。即ち、研究者は実験の参加者の一人として厳密に関与する過程を重視する。McKernan, J. Curriculum Action Research: A Handbook of Methods and Resources for the Reflective Practitioner. London: Kogan Page, 1991.
- 16) 韓国の教育分野で研究されたアクションリサーチの場合、質的な研究が92%で圧倒的に多い割合を示している。Kang, Ji-Young; So, Kyung-Hee. Educational action research in Korea. Asian Journal of Education. 2011, vol. 12, no. 3, p. 197-224. (韓国語)
- 17) McKernan は現場では状況的な知識 (situational knowledge) に依存するため、量的な方法よりは質的な方法の方が効果的であると主張している。McKernan, J. Curriculum and Imagination: Process Theory, Pedagogy, and Action Research. London: Routledge, 2007, 264p.
- 18) Mills, G. Action Research: A Guide for the Teacher Researcher. 3rd ed., Prentice Hall, 2006, 272p.
- 19) Kram, K. E., Phases of a mentoring relationship. Academy of Management Journal. 1983, vol. 26, no. 4, p. 608-625.
- 20) Sung, Moon-Ju; Yoo, Ji-Young. Supporting un-

- dergraduate student mentors in mentoring programs for youth: A case study. *Studies on Korean Youth*. 2013, vol. 24, no. 2, p. 5-33. (韓国語)
- 21) Cho, In-Sook; Kim, Hee-Sook. A study on the parents mentoring programs supported by elementary school libraries in Seoul. *Korea Biblia*. 2009, vol. 20, no. 2, p. 155-166. (韓国語)
- 22) Yang, Min-Wha; Seo, Youjin. The effects of a reading intervention for students with reading difficulties: Through college student mentoring program. *Special Education Research*. 2009, vol. 8, no. 1, p. 87-110. (韓国語)
- 23) Kim, Ji-Yeon. 青少年メンタリング活動運営マニュアル. 韓国青少年開発院, 2010, 104p. (韓国語)
- 24) Kim, Jae-Chel; Sung, Kyung-Ju. Survey and Discussing to stimulate mentoring program activities for college students. *教育研究*. 2008, vol. 16, p. 97-118. (韓国語)
- 25) メンタリングプログラムに参加する学校によって、司書教師、非常勤学校司書、教科教師など、学校図書館の担当者の身分が異なる。
- 26) 2013と2014年はP大学の事情によりD大学だけ参加した。
- 27) 「韓国子ども図書賞」, 「ジョン・ニューベリー賞」, 「韓国小泉児童文学賞」などを参考にした。
- 28) Kim, Kung-Jun et al. A Study on the Activation of Youth Mentoring. *National Youth Policy Institute*, 2012, 374p. (韓国語)
- 29) Dale, E. *Audiovisual Methods in Teaching*. 3rd ed., New York: The Dryden Press, 1969, 732p.

要 旨

【目的】 学校図書館と公共図書館の新たな協力型プログラムを提案することを目的とした。具体的には、1) 学校図書館と公共図書館が求める協力に関する検討、2) 学校図書館の要求だけではなく、公共図書館の状況を考慮した協力型プログラムを設計、3) 設計したプログラムを実践した後、成果や課題を分析して改善点を考察した。

【方法】 学校図書館と公共図書館の現状調査を2012年4月から6月まで、釜山地域の公共図書館24館および小・中・高644校を対象にして行った。また、質問紙の内容と関連して、インタビュー調査も加えた。そこから、支援方法の一つとして、「読書メンタリングプログラム」を考案し、2012年から2014年の間にプログラムを実施した。分析は、プログラムに参加した小学生に対する感想文やインタビュー調査、教員に対する簡単な質問紙やインタビュー調査、プログラム運営していたメンターが作成した活動計画書や活動日誌の分析、メンターに対して行われた質問紙およびインタビュー調査の結果をデータとして行った。

【結果】 現状調査の結果、学校図書館は読書教育を行う専門員の派遣を要求しているが、公共図書館は人手や予算の不足のため、専門的な知識を備えボランティアとして活動できる人を必要としていることがわかった。それらの条件を検討し、新しい協力型プログラムとして図書館情報学を専攻している学部生を活用する「読書メンタリングプログラム」を提案した。「読書メンタリングプログラム」は、3年間に行った。その結果、公共図書館、学校図書館、それにメンターである学部生のいずれにも、有意義な成果を示した。今後、課題として、メンティに対するニーズ分析、メンターの教育内容の強化、メンタリングプログラムの方法などを書いたマニュアルの開発、メンタリングプログラムを持続するための運営協力体制の構築を指摘した。

韓国における学校図書館と公共図書館の協力型プログラムの開発：読書メンタリングプログラムを中心に

付録 1. 学校図書館への質問紙

I. 基本事項

1. 学校図書館担当者の職務は何ですか。
①一般教員 ②司書教師 ③非常勤司書 ④その他
2. 学校の種類を教えてください。
①小学校 ②中学校 ③高等学校 ④その他
3. 現在の学校を含め学校図書館を担当した年数の合計を教えてください。
①1年未満 ②1年以上～2年未満 ③2年以上～3年未満
④3年以上～4年未満 ⑤4年以上～5年未満 ⑥5年以上
4. 学校図書館を担当している理由に関して教えてください。
①業務分担による ②自分の意思による ③周りの勧めによる
④司書教師 ⑤その他 ()

II. 運営現状

5. 学校図書館を開放する時間は一日のうち、何時間ですか。
①1時間未満 ②1時間以上～3時間未満 ③3時間以上～6時間未満
④6時間以上～9時間未満 ⑤9時間以上
6. あなたが、学校図書館に滞在する時間はどれくらいですか。
①1時間未満 ②1時間以上～3時間未満 ③3時間以上～6時間未満
④6時間以上～9時間未満 ⑤9時間以上
7. あなたが学校図書館に滞在していない時、図書館を管理する人がいますか。
①特にない ②保護者ボランティア ③児童や生徒による図書部 ④その他
8. 学校図書館の重要機能は何だと思いますか。(複数回答可能)
①読書支援機能 ②教授学習センター機能 ③教科授業活動機能
④余暇休憩機能 ⑤文化センター機能 ⑥自律学習空間機能
⑦情報文化センター機能 ⑧その他
9. 今後、より強化が必要な学校図書館機能は何だと思いますか。
①読書支援機能 ②教授学習センター機能 ③教科授業活動機能
④余暇休憩機能 ⑤文化センター機能 ⑥自律学習空間機能
⑦情報文化センター機能 ⑧その他
10. 学校図書館の機能を改善するための方案は何だと思いますか。
①施設整備 ②蔵書の質 ③運営時間 ④読書指導活動 ⑤資料活用教育
⑥図書館活用授業 ⑦行事プログラム ⑧図書館の専任の確保 ⑨運営予算
⑩地域社会サービス活動 ⑪その他

III. 読書教育および読書活動

11. 読書教育プログラムの企画を立てるのはだれが行いますか。
①司書教師 ②図書館担当教員 ③各クラスの担当教員 ④その他
12. 読書教育を実際に行うのはだれですか。
①司書教師 ②図書館担当教員 ③各クラス担当教員 ④その他
13. 主な図書館教育の形態は何ですか。
①朝の読書 ②読書 QUIZ ③図書展示 ④読書討論 ⑤読書後感想文大会
⑥読書関連授業 ⑦読書関連教員指導 ⑧読書教室および図書館体験教室運営
⑨読書教育特別講義 ⑩その他 ()

14. 読書教育に関する生徒の反応はどうか。
 ①全く関心がない ②関心がない ③普通 ④関心が高い ⑤大変関心が高い
15. 図書館運営に関して外部の機関から支援を受けたことがありますか。
 ①受けたことがない ②公共図書館による支援
 ③ほかの学校図書館の司書教師による支援
 ④ほかの学校図書館担当教員による支援 ⑤その他
16. 公共図書館による学校図書館に対する支援は充分だと思いますか。
 ①全く要らない ②要らない ③普通 ④充分である ⑤大変充分
17. 今後、希望する支援は何ですか。
 ①担当司書を直接派遣して行う読書教育および読書行事
 ②資料選定および収集に関する支援
 ③図書の点検および廃棄 ④教育や特別講義のための講師の支援
 ⑤図書館活用授業に関する支援 ⑥資料の分類およびDB構築に関する支援
 ⑦図書館利用教育に関する支援 ⑧巡回文庫および貸し出しサービス支援
 ⑨DLS(学校図書館デジタルシステム)使用方法に関する教育
 ⑩ボランティアに対する教育支援 ⑪その他
18. 公共図書館と協力した読書教育が必要だと思いますか。
 ①全く必要ない ②必要ない ③普通 ④必要である ⑤大変必要である
19. 公共図書館による学校図書館支援に関して、あなたの意見を自由に書いて下さい。

付録2. 公共図書館への質問紙

I. 基本情報

1. あなたが勤務している図書館の名前を書いて下さい。
 ()
2. あなたが勤務している図書館では学校図書館を支援していますか。
 ①はい、 ②いいえ(17番の質問に)
3. 学校図書館の支援に対する業務を担当している者は何人ですか。
 (司書: 人, その他: 人)
4. 学校図書館支援の業務を担当している者の業務に関して以下の中から選んで下さい。
 ①学校図書館支援だけ担当している
 ②公共図書館業務+学校図書館支援業務
 (仕事の割合-公共図書館業務: %, 学校図書館支援業務: %)
5. 学校図書館支援の予算は、年間どのぐらいですか。(年間:)
6. 学校図書館支援の予算の使い方に関して教えて下さい。
 ①給料 ②資料購入 ③図書館用品の購入 ④講師の講義費 ⑤その他

II. 公共図書館による学校図書館支援の現状

7. 現在、あなたの図書館ではいくつの学校を支援していますか。
 小学校(), 中学校(), 高等学校() その他()
8. あなたの図書館と協定の覚書を取り交わした学校図書館がありますか。
 ①ある(9番の質問に) ②ない(10番の質問に)

韓国における学校図書館と公共図書館の協力型プログラムの開発：読書メンタリングプログラムを中心に

9. あると答えた場合、いくつの学校と結んでいますか。
小学校（ ），中学校（ ），高等学校（ ） その他（ ）
10. 学校図書館から業務支援の要請はどれくらいありますか。
①全然ない ②あまりない ③普通 ④たまにある ⑤大変ある
11. 公共図書館による学校図書館の業務支援に関してどう思いますか。
①必要である ②不必要である ③考えたことがない
12. 現在、学校図書館の業務を支援していることがあれば、その内容に関して選んで下さい（複数回答可能）。
①DLS 使用法教育 ②担当教員研修 ③図書館行事支援 ④図書館利用教育
⑤巡回文庫や団体貸し出しサービス ⑥司書派遣 ⑦その他
13. 学校図書館業務を支援するのにもっとも難しいことは何ですか。（複数回答可能）
①人手不足 ②予算不足 ③資料不足 ④専門性不足 ⑤障害要因なし

III. 学校図書館および読書教育支援に関する公共図書館の意見

14. あなたの図書館では持続的に学校図書館を支援する計画がありますか。
①はい ②いいえ
15. あなたは、公共図書館の現状を考えた上で、学校図書館を支援することをどう思いますか。
①現実的に難しい ②大丈夫 ③考えたことがない
16. 公共図書館による学校読書教育の支援および協力に対する意見を教えてください。
()

* 以下は2番の質問で‘いいえ’と回答した場合のみお答えください。

17. 今後、学校図書館を支援する計画がありますか。
①はい ②いいえ (19番に)
18. 計画がある場合、どのような支援を考えていますか。（複数回答可能）
①DLS 使用法教育 ②担当教員研修 ③図書館行事支援 ④図書館利用教育
⑤巡回文庫や団体貸し出しサービス ⑥司書派遣 ⑦その他
19. 学校図書館の支援に対する計画がない場合、その理由は何ですか（複数回答可能）。
①人手不足 ②予算不足 ③資料不足 ④専門性不足 ⑤障害要因なし
20. 公共図書館による学校図書館業務の支援に関してどう思いますか。
①必要である ②不必要である ③考えたことがない
21. 公共図書館が学校図書館を支援する時、どの業務に関する支援がもっとも必要だと思いますか。
①学校図書館運営に関する支援 ②読書教育に関する支援 ③専門家の派遣
④関係者に関する研修 ⑤その他 ()
22. あなたは、公共図書館の現状を考えた上で、学校図書館を支援することをどう思いますか。
①現実的に難しい ②大丈夫 ③考えたことがない
23. 公共図書館による学校読書教育の支援および協力に対する意見を教えてください。
()